



**"God created the heavens and the Earth, then created Fiji."**  
**—Losefati Ligairi** “神は天国と地球を創造し、その後フィジーを創った。”—Losefati Ligairi

まだ誰も乗ったことのないブレイクを追い求めて旅を続ける。  
 それはサーファーにとって、永遠に続く究極の夢なのかもしれない。  
 南太平洋に浮かぶ300あまりの珊瑚の島々からなる楽園フィジーへと、  
 未開のリーフブレイクを探す旅に出たサーファーガールたちの探訪記。

# Chief From Across The Sea

夢の波の楽園、フィジー  
 未開のリーフ探訪記

Photos: Collin Erie, Tim Burgess, Chris McLennan, Kaley Swift  
 Story by Jennifer Flanagan  
 Translation: Eri Nishikami  
 Riders: Kaley Swift, Chandler Parr, Mary Osborne



コリンの古いSuper 8で撮影隊のつもり。ジェニとケイリー。Photo: Collin Erie



どこまでも続く深い海を探検するチャンドラー。Photo: Tim Burgess

ゆらゆらと揺れる波止場の両側には時代遅れの船が停泊していた。輝く太陽の光と青い海に私の疲れた目が慣れるには少し時間が必要なようだ。波止場の喧騒の中、日焼けした船乗りたちの、暑さなど気にならないかのような笑い声やつまらない喧嘩が聞こえてくる。トロール漁船は出荷用のワフー(鰯の一種)やマグロのアイスボックスを空にし、海を越えてやってきた貨物船からは、錆びた電化製品や新車、そして何が入っているのかは分からないが

様々な木箱がつみ下ろされ、そのわきでは出発前の最終点検や燃料補給が行われている。ロープにつながれた人影が古びた船体のまわりについた錆びをブラシで落としている。そして流れ出したディーゼルが作り出す不思議な色をした海水へと錆びが流れ落ちていくのが見えた。最先端の技術を持って製造され、かつてはもてはやされたであろう使われなくなつた船の数々は不気味な船窓と索具の骨組みを残し、ひっそりとこの南太平洋に浮かぶ第三

世界の港で余生を過ごしているようだった。

輝く海を背景に、真っ黒なフェリーの入り口が大きな口を開けて私たちを迎えた。ヒッコリー色をした肌に不思議な髪型、そして見たこともないような大きな足をした何百人のフィジアンたちが我先にとその暗闇へと飲み込まれていく。波止場から逃げるよう舟へとタラップを移動する。そのうだるような人波にのまれ私たちはお互いを見失ってしまったが、誰



Tai Tui, 別名“海の彼方からやってきたチーフ”



笑顔。Photo: Chris McLennan

がどこにいるか見つけるのは難しいことではない。私たちの肌の色はまるで、胡椒のなかに間違えてまぎれこんだ塩の粒みたいに真っ白に見えた。

たくさんの荷物とボックス、そして動き回る子供たちと茹でたタロイモやフライドチキンが入ったタッパーを手に、フィジアン御一行はまるで中国のパレードに出てくる紙ドラゴンのように船の下部から階段を登り外のデッキへと移動し、これから長い船旅のための居場所を確保していた。私たちは暑さと空腹感と戦いながら、眠気でぼんやりしたまま彼らに続いて船の底へと進んでいった。

10時間の夜行便でのフライトの後、その日の朝早く私たちはようやくフィジーの姿を見た。山々に囲まれ、322の諸島を擁し、未だ多くの自然が残る赤道直下のマラカイト色をしたあのイジー。オーストラリアの東に位置する500以上の砂の島がコバルトブルーの南太平洋に浮かんでいた。ロスの空港の喧騒から水田とマンゴーの木に囲まれた、ターミナルがひとつしかないフィジーのナディ空港に到着すると、カリフォルニアのメアリー・オズボーン、ケイリー・スウィフト、ホリー・ベックとチャンドラー・パーそしてカメラマンのコリン・エリー達と合流し、私たちのボートトリップは始まった。142フィートのモータースクーナー船 Tai Tuiでタヴァルアやナモツなどの人気スポットを避けて北部にある島や珊瑚礁を目指すのだ。ところでこの旅の目的は波乗りだけ

カーテンのように誰かの体臭が部屋を満たしていた。

こんな船で一泊するなどということは想定していなかったものの、船室の居心地にはどう考えても問題があると判断し、風の強い眠れぬ夜をスチール製のテーブルの上で過ごすことにした。ケイリーはバーバラ・キングソルバーで読書タイムを、メアリーはiPodワールドへ

と消えていく一方、私はカットオフショーツにタイトすぎるピンクのTシャツを着た中性的なティーンエージャーとなぜか冗談を交わしていた。外洋へと向かうにつれて外気の温度が下がり海ではうねりがあがってきた。

私たちの近くでは白髪交じりの労働者がブルーのビニール防水シートの上で横になってプラスチックのボウルの中に粉々になった骨



笑顔のリラックスサーフィン。ケイリーとジェニ。Photo: Tim Burgess

この後リーフの洗浄を受けるホリー。  
Photo: Tim Burgess



天国と地球を見つめる。メアリー。Photo: Chris McLennan



ロコガール。Photo: Collin Erie

のような粗い粉と水を混ぜている。カヴァ・セレモニーが始まったようだ。200年前、フィジーは南太平洋の食人文化の中心地として恐れられていた。裸同然の原住民たちは、かつて戦いで捕虜となった敵や座礁した船乗りを捕らえては丸焼きにし、それが習慣となっていたのは確かである。ありがたいことに、現代ではフィジアンはよそ者を串刺しにする人種としてではなく、最もフレンドリーな人々として知られている。

ココナツで作ったカップを回し、男たちは幸福感と眠気を誘うとして知られる濁ったカヴァをがぶ飲みし、飲み込む時に3回手をたたいた。カヴァが効き始めたのか、男たちはデ

ッキの上に散らばってうつぶせに寝てしまった。それを見ながらテーブルの上の私は寝心地の悪さにごそごそしていたらコリンと目があった。間違いなく同じことが私たちの頭をよぎっていた。どれだけのカヴァを飲んだらこれから14時間起きずに寝ていられるのか。とにかく今は何時間かの眠りの代わりに人食い文化に注意することにした。

タクシーに乗り込んだ私たちはハイビスカスハイウェイをTui Taiへ向けて走っていた。タクシーの運転手はほとんど壊れたスピーカーから安っぽいインド映画音楽やヒンズー語のポップを流している。悪路に車が流れ、通学中の子供たちを避けてハンドルを切ると、

バックミラーについていたシバ神やガネーシャなどヒンズー教の神々のお守り揺れてフロントガラスにぶつかった。白く輝く砂浜と揺れる椰子の木のイメージの陰で、ここフィジーでは文化的対立があることを思い出した。

フィジーは人口のほとんどを3500年以上前にこの地に住み始めたマラネシア人と言ふ先住民であるフィジー人が占めているが、経済的には1800年ごろにイギリスの植民活動によって契約労働者としてつれてこられたインド人の移民の子孫がすぐに中心となっていた。労働契約が切れた後も島にのこったインド人の子孫であるフィジー生まれのインド人が今でも多く存在する。

土地の所有権を何十年にも渡り拒否され続けたインドフィジアンたちは経済活動に専念するようになった。一方、先住のフィジー人たちは自給自足のためのサトウキビや米、バナナなどの農業や漁業といった伝統的な活動を続け、結果、土地は持っているが現金に乏しい。インドフィジアンを恐れるフィジー人という構図は、社会的、外交的に優位に立とうとするフィジー人というシステムを生み出し、インドフィジアンたちには、先住フィジー人に優先的な政治や差別の犠牲者だという認識がある。

両者に違いはあるものの、お互いに摩擦があることを認識しようとしないのも事実だ。こ

**"We need to reach that happy stage of our development when differences and diversity are not seen as sources of division and distrust, but of strength and inspiration."**  
—Josefa Iloilo, former President of Fiji

"我々は個々の違いや多様性が分離と不信を作り出すのではなく強さとインスピレーションの源になりうることを理解する、そういった心休まるステージに到達しなければならない" — Josefa Iloilo, フィジー前大統領

この後リーフの洗礼を受けるホリー。Photo: Tim Burgess



500以上の島々に囲まれたフィジーは最高のサーフカントリー。Photo: Chris McLennan

れは部外者に対する態度であるだけなのかも知れないが、タクシーの運転手にこのことをついてみたら、こんな答えが返ってきた。「私たちには確かに違う。でも、皆フィジーに住む島民でることに変わりはないんだよ」。誰も一言も発さないまま先を進んだ。

サヴァサヴァから20分ほど行くと、舗装された2レーンの道路は砂利と砂の道になっていた。バニヤンツリーは迷路のようなつるを広げ、バナナやブルメリア、そして窓からは椰子の実がビーズのような目で私たちが人気のないエリアへ進んでいくのを見ていた。

マチェーと呼ばれるナタをもち、スルと呼ばれる男女兼用のコットンのロングスカートを履いた労働者が大きな声で“ブラ!”と言

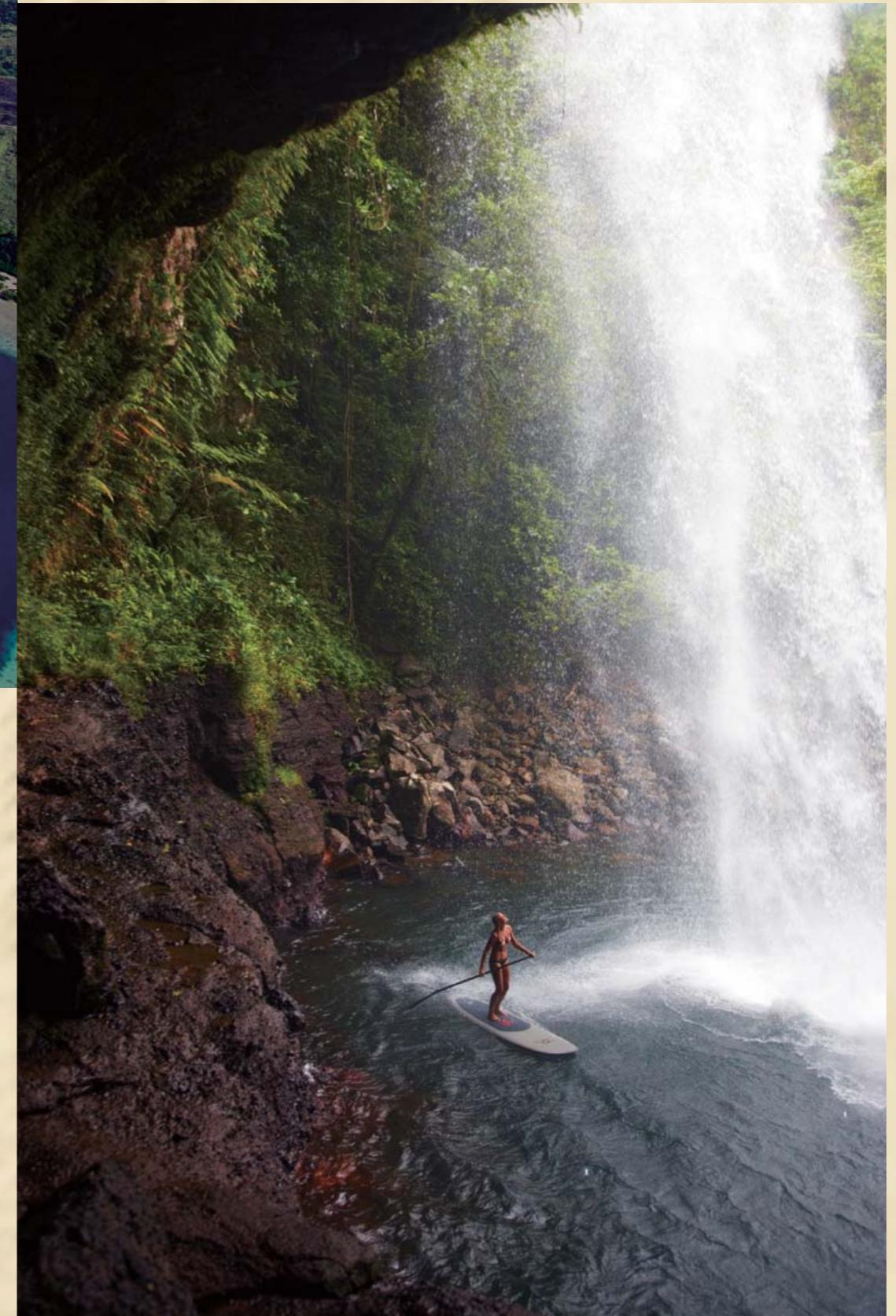
いながら手を振っていた。“ブラ”はフィジー語で“こんにちは”を意味し、最初のメブモにアクセントを置く。どこからともなく現れた窓のないバスが人をたくさん乗せて町のほうへ走っていった。

砂利道を曲がると南太平洋最大の湾であるネタワペイが見えてきた。海岸には満潮や台風でやられないよう木製の高床式の船小屋が点在しているのが見える。そして、35時間の長旅のあとようやくメ海の彼方からやってきたチーフモとの呼び名を持つTai Tuiの姿がちらりと見えた。

Tai Tuiはもともと300人収容可能な島間の移動手段として1980年にフィジーで創られた。何度もリノベーションを重ね、現在では豪華ア

ドベンチャー号として知られている。定員24人、優雅な特別室と古風なキャビンを備え、12人のクルーは全員フィジー人だ。ほぼモーターで動いているが3本のマストがこのしなやかな船を二分し、まるで海賊船のような風貌を与えていた。カリフォルニア出身の男性とフィジー人の妻が所有するこの船はフィジー北部で唯一の観光船で、アウトドアを中心としたアドベンチャーツアーを提供している。

が、今回のトリップはこれまでのTai Tuiアドベンチャーとは一味違う。オーナーはこの船をサーフトリップのために利用したいと考えており、その細かい内容を決めるために、この船にとって最初のサーフサーチへと私たちを招待してくれたのだ。4000平方マイルに広がる珊瑚礁を擁するフィジーはサーフツーリズ



ムの中心的存在だが、ほとんどのツアーは世界的に有名な、レストランズ、クラウドブレイク、ウィルクスパスなどのスポットがあるタヴァアルアやナモツなど、ヴィティ・レヴァからのアクセスが良い島に限られているのが現状である。遠方の島やこのフィジー北部の珊瑚礁にも波があることは知られているが、そのクオリティやどれほどコンスタントに波があるのか等はほとんど知られておらず、今回私たちがそれを見てこようというのだ。

カメア島、ラビ島、タヴェウニ島などを回ってみたが、5日間に渡りサーフできそうな波は見当たらなかった。暖かい水に珊瑚礁、そして岩だらけの海岸線と、素晴らしい波の可能性を感じる全ての材料はそろっていたが、その可能性を試すにはこちらものんびりアイランドタイムなウネリの到達を待つしかなかった。

ジョージアチャンネルを通り南へ向かい、中央太平洋に浮かぶバナバ島という小さな島を追いやられた人々が住むラビ島を周った。1900年代初頭、多くのリン酸がみつかったバナバ島でイギリス人は先住民を邪魔者として島から追い出した。そして彼らは未だにこのラビ島の小さな村で、下水施設すらない小屋で生活している。

アルバート湾にある未開のラビ島の集落で歯の抜け落ちた老人は当時の移住の話をまるで昨日のことのように語ってくれた。椰子で出来た小屋の前でこの老婆はホリーに、敷物を織ることが結婚を成功させるのにいかに重要なことを説いていた。外では今夜の食事になるであろう鶏が鳴いている。追放され、自分たちの選んだ道ではない方向へと進むかわりに、バナバ島の人々は時間の流れそのものを止めることを選んだようにみえた。彼女にTシャツと歯ブラシをわたして、私たちは携帯電話が繋がりiPodが待っている船へと静かに戻った。



“Bula bula”ジェニ、ホリー、ケイリー、チャンドラー、メアリー。Photo: Collin Erie

のようだし、水平線に見える真っ白なスープは何千匹ものアホウドリみたいだった。トレードウインドと熱帯特有の嵐などの影響を受けやすいこのエリアでは、波は外洋を越えて相当の距離を進み、危険な美しさと共にこの珊瑚礁の上で碎ける。私たちの目の前の浅いリーフの上では6フィートの波が割れていた。深い海を嵐と共に進んできた波はこの海中都市のような棚の上でそのエネルギーを爆発させる。深さのある安全なチャンネルでリーフを磨くセットを二つ見た後、私たちはパドルアウトした。

大きな水の壁がチャンネルに向かってきれいに割れている。アウトサイドのピークから、この南の海の美しい波は水を吸い上げながら

波のない5日間を過ごし、私たちは波乗りしたくて仕方がなくなっていた。波情報をチェックすると、水平線の向こうに程よいノーススウェルが来ているようだ。海図の上で鯨の形をしたこの島のどこかにまだ誰もみたことのない波があることを信じ、一晩かけてカメア島へと船を進めた。

夜明けは延縄にかかった36インチのワフーと共にやってきた。デッキの上で銀色のストライプを輝かせた魚はバタバタと跳ね、調理人がランチのために調理室へ持っていた。チャンドラーは波がずっとないことにがっかりした様子でそれを眺めていたが、船のクルーがウインクしてこう言ったのを聞いて笑顔になった。「ワフーはスウェルが近づいているときに釣れるんだ」。私たちはヌクバラヴ湾に船を係留させ、ゾディアック号にボードを積んでとにかく外洋へ行ってみることにした。

出発した時アメリカは冬だったのに、赤道を越えて南太平洋に来たらそこは真夏だった。時期的に今はヴィティ・レヴ周辺の南西に向いているポイントの多くにとってオフシーズンである。しかし、11月から4月にかけては、私たちの目的地でもある人もまばらな北部の島々で北太平洋のスウェルをヒット出来る可能性が最も高い時期である。

色鮮やかな魚が泳ぐ珊瑚の上を通る。水深のあるところではネイビーブルーに、浅いところではターコイズブルーへと変化する海の色は、まるでまだらに混ざった絵の具のパレット



本日一番の波に乗るジェニ。  
Photo: Tim Burgess

メアリーがお届けしました。  
Photo: Collin Erie

珊瑚礁の上で力強く割れる。メイクするには早いテイクオフがカギだ。一瞬の迷いはリーフとのランデブーを意味する。ホリーはピークの後ろからレイティイクオフを試みたが浮かび上がってきたら腰の辺りがリボンのように裂けていた。彼女の勇気のおかげでその後他のメンバーは出来るだけ水深のあるところからティイクオフするよう気をつけた。しかしやはり努力は報われるものだ。その後、“むこう見ず”ホリーはこのトリップで一番の深いチューブをメイクした。グラブレールでほとんどフリーフォールのティイクオフの後、かろうじて細いアーモンドの形をしたバレルの中へ消えた彼女は、その後洞窟のような深いバレルの奥からプロンドヘアと粒になった泡と一緒に勝ち誇った様子で吐き出された。

何度もセットにやられ、パドルバックでパンパンになった腕でへとへとなりながら Tai Tuiへ戻る途中、私たちは連日のフラット地獄から連れ出してくれたあの魚にちなんでこのポイントを“ワフー”と呼ぶことに決めた。船



夜の海をクルーズ。Photo: Tim Burgess



戻ると新鮮な魚を使ったタコスが待っているはずだ。

笑顔でいっぱいのフィジーの女性たちが鮮やかな色にペイントされたワンルームの板張りの小屋へ招待してくれた。花柄のスルに色がごちゃまぜになった大きな古着のTシャツを着ている。ここは共用のミーティングエリアのようなものらしく、古いヨリ張りの窓と入り口付近には覗き見しようとするシャイな子供たちが影を作っていた。男たちはカッサヴァやタロイモなどの農場で働いているようだった。これらの農作物はガソリンやコーヒー、靴など、自分たちで作ることの出来ないものと交換される。私たちは複雑に編まれたパンダヌスの葉で出来たマットの上に部屋の大きさと同じサイズの円になって座っていた。これから何が起るのか全くわからずにいると、突然、女性と子供たちが夢中になって歌を歌いだし、手拍子がそれに続いた。女性たちの中で一番

年をとっている裸足の“ブブヴァレワ”（タヒチ語でおばあちゃん）が立ち上がり、腰に手を添えてゆっくりと踊りだした。そして彼女は周囲に目配せすると、そっとコリンに近づき、彼の手をとってフィジアン独特の横に並んで踊るワルツのようなダンスマタウラタレモを踊りだした。スルを揺らしながら踊る彼女にコリンはほとんどついていくことができず、それを見た子供たちが嬉しそうにきゃっきゃと笑っていた。

その日早く、ヴァヌア・レヴの北東の先にロングボードで楽しめそうな波をみつけたあと、ナムカイラウという人口28人の人里はなれた村をみつけた。私たちが3フィートのファンウェーブを楽しんでいる間に、船のクルーは岸に近づく許可を得るためにセヴセヴというお土産をもって挨拶を行ったらしい。私たちが後で村を訪れると、ビーチには女性と子供達が笑顔で手を振って出迎えてくれた。私たち

はこの村を訪れた初めての外国人だった。

原始的な家と離が広い草原の上に点在していた。再び外で円形に座らされると、カヴァの準備が始まった。ココナッツをコップに、私たちはローカルたちのお気に入りのグレーの飲み物を順番にゴクゴクと飲む。一口飲むごとに舌鼓を打ち、まるで泥の味などしないかのように振舞った。子供たちが集まってきて、学校で教えられた習い立ての英語で“What's your name?”（名前は何ですか？）や“Are you married?”（結婚していますか？）と聞いてきた。小さい子供たちは母親のスカートの影からこわごわこちらを覗いている。他の子供たちは集合写真を撮って、液晶画面に現れた自分たちの顔をみて大喜びしていた。彼らは写真を撮られたことなどなく、この小さなタルの箱は彼らにとって魔法の箱だった。

フィジーを味見。メアリー。  
Photo: Tim Burgess



ケイリーと新しい友達。  
Photo: Collin Erie

新しく出来た友達と何時間も笑い、歌い、踊ると手はたきすぎて痛くなり、お腹はアルコールでいっぱいだった。残念だが船へ戻る時間だ。村の主人はパーティーを終わりにしたくないのか、星が見える草のマットの上で一晩泊まっていかないかと聞いてきた。「晩御飯も食べていけば良いさ」と提案してくれたが、帰路へ着くため船へ戻らなければならなかった。海岸ではカラフルなサンダルをはいた笑顔の女性たちが私たちを見送ってくれた。彼女たちは私たちの船が見えなくなり、その姿が素敵な思い出となるまで手を振っていた。



**“Life is like this: sometimes sun, sometimes rain.” –Fijian proverb**

“人生には晴れているときもあれば雨が降っているときもある” —フィジーの格言。

雲と水の間をサーフィンするジェニ。Photo: Tim Burgess



大自然を探索。チャンドラー、メアリー。Photo: Tim Burgess